

『ダメ。ゼッタイ。』に代わる言葉を広めよう。 2024年度キャッチコピー大賞は 『誰でも、なる。誰でも、なおる。』に

取材：編集部

『ダメ。ゼッタイ。』のスローガンを暮らしの中で見聞きすることは未だに多い。

この標語を発信してきたのは財団法人麻薬・覚せい剤乱用防止センターだ。麻薬・覚せい剤・シンナー・大麻・危険ドラッグ等の薬物乱用の防止、および向精神薬等の適正使用を推進するキャンペーン運動として、この標語を長年使い続けてきている。

『ダメ。ゼッタイ。』がもたらしてきた害

このスローガンには以前から次のような多くの批判が寄せられていた。

- 薬物を乱用した「人」自身がダメで、落伍者である、犯罪者であるかのような印象を与え、彼らの社会的孤立を深めている。
- 薬物使用について厳しく考える人を増やしてしまい、薬物依存患者の支援や社会復帰を阻害している。
- 「一度やったら人間をやめることになる」という脅しの予防教育は、すでに薬物を乱用した人に対しては何の支援も対応にもならない。
- 治療、他者への相談が行いにくい雰囲気を作られ、治療窓口へつなげるということに対しては逆効果になる。
- グレーゾーンの薬を禁止物に追い込む難物である。近年では、合法である処方薬などの乱用が深刻になっており、違法・合法では区別できない問題が生じている時代にそもそも合わない。

『誰でも、なる。誰でも、なおる。』が選ばれた理由

そこで『ダメ。ゼッタイ。』に代わる啓発をみんなで作り、広める目的で、公益社団法人ギャンブル依存症問題を考える会が、新しいキャッチコピー、ポスター、体験談を一般募集した。審査員は写真（右上）の6人。805件もの応募があるなか、2024年9月30日、その授賞式が行われた。

キャッチコピー部門大賞に選ばれたのは、西川佳乃さん作『誰でも、なる。誰でも、なおる。』だった。西川さんは、自身もギャンブル依存症者の家族であり、なおかつプロのライターとして現役で活躍中の女性。壇上に登った西川さんからは、自身の苦しみと実感が作品制作の糧となったエピソードが語られた。

講評では、このキャッチコピーの「韻を踏んで短く、広めやすい」点が高く評価された。総合司会の田中紀子さんから「“治る”と言っていいのか」と問いかねがなされると、それに対し審査員の松本俊彦さんは、「これまで“依存症は治らない、ただ回復し続けるだけ”という説明がなされてきたが、これが当事者や家族に絶望を与えてきた面もあった。これからは“依存症は治る。ただ再発しやすいけどね”という説明に代えてもよいのではないかと述べた。

橋島康祐さんは、『ダメ。ゼッタイ。』と言われると思考がフリーズし、《現在》しかなくなる。一方、『誰でも、なる。誰でも、なおる。』には現在と《未来》があり、アクション



左から田中紀子さん（公益社団法人ギャンブル依存症問題を考える会 代表）、岩永直子さん（Addiction Report編集長）、小島慶子さん（エッセイスト）、赤坂真理さん（小説家）、橋島康祐さん（クリエイティブ・ディレクター Hangover Plate Inc.）、松本俊彦さん（国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部長）

が取れる。だから良いと思った」と評していた。

小島慶子さんは、ご自身の過食嘔吐の経験を語りつつ、「自分は依存対象がたまたま身近にあった食べ物だったが、薬物でも恋愛でも何でもあり得た。だからこの“誰でも、なる。”は非常に共感できる言葉だった」と評した。

ポスターは軽やかに、爽やかに『リカバっていこう。』

ポスター部門で大賞に選考されたのは、今井愛さんの作品。『リカバっていこう。』と大きなキャッチコピーと青年が描かれたポスターだ。今井さんも、自身がギャンブル依存症者の家族である。

審査員の岩永直子さんは、『『ダメ。ゼッタイ。』ポスターは、よくドクロ、ゴキブリ、ねずみなどと共に描かれ、怖さ・偏見を植え付けてきた。今井さんのポスターの絵と『リカバっていこう。』の爽やかさ、軽やかさが、このイメージ払拭に効果的だと感じた」と評した。

緊張感の少ない社会へ行こう

赤坂真理さんは『『ダメ。ゼッタイ。』がもたらしてきた“失敗できない社会”はきつい。失敗できないと思えばますます依存物に頼るしかなくなる」と警鐘を鳴らした。

編集部もそう思う。失敗しないよう脅

し諭して使わせないようにする社会、一度使ったら人生が終わりだという緊張感のある社会。そうではなく、安心して失敗でき、失敗したら必要な支援があり、人に触れることができ、そして経験から学び、試行錯誤できる、そういう緊張感の少ない社会のほうが生きやすいと思う。それが多くの人の実感ではないだろうか。

その意味で、今回採択された『誰でも、なる。誰でも、なおる。』のキャッチコピーや『リカバっていこう。』のポスターが広まる動きに参同したい。

精

キャッチコピー部門 大賞

にしかわ かの
西川 佳乃 さん

誰でも、なる。
誰でも、なおる。

—— 依存症は、社会が正しく理解することで
予防・回復ができる身近な病気です。 ——

ポスター部門 大賞

いまい あい
今井 愛 さん

